

3 市街地のせせらぎにみる歴史的風致

はじめに

三島の市街地には豊富なせせらぎがある。このせせらぎの源は、三島市から約40kmも離れた富士山の雪解け水が地下に浸み込んだ伏流水である。この伏流水が三島駅南側で自噴し、市立公園樂寿園の小浜池（こはまいけ）やその東側にある浅間神社、菰池（こもいけ）、白滝（しらたき）公園で湧水地を形成している。そして、小浜池は蓮沼川（はすぬまがわ）（宮さんの川）と源兵衛川（げんべえがわ）に、浅間神社・菰池・白滝公園の湧水は桜川や御殿川（ごてんがわ）に流れ出て、市街地のせせらぎとなっている。

昭和9年（1934）から三島に滞在していた太宰治は、昭和15年（1940）三島の街を題材にした『老ハイデルベルヒ』という短編小説を発表した。その中で三島の街の様子を「町中を水量たっぷりの澄んだ小川が、それこそ蜘蛛の巣のように縦横無尽に残る隈なく駆けめぐり、清冽の流れの底には水藻が青々と生えて居て、家々の庭先を流れ、縁の下をくぐり、台所の岸をちやぶちやぶ洗い流れて、三島の人は台所に座ったままで清潔なお洗濯ができるのでした」と描いた。上水道普及前の三島は、このように河川の水を生活用水に利用していた。

三島市の上下水道事業化開始は昭和23年（1948）であったものの、当初はその普及率は低く、川沿いの家では岸に張り出したカワバタ（川端）を備え、そこで風呂の水くみ、野菜洗い、洗濯などをしていた。また、水辺から離れた家には、共同で利用するカワバタがあった。蓮沼川（宮さんの川）、源兵衛川、御殿川、桜川など市街地を流れる河川流域に残るカワバタは、今も庭の花木や道路への水撒きに利用されている。

また、湧水源の近くには水神様など祠や社があり、水の湧き出る場所は、神様がいる場所という信仰が今も根付いている。

三島には、「三尺下れば、真水になる」という言葉があり、これは川の水のきれいさに対する人々の信頼と誇りの表れであり、せせらぎは「水の都」の象徴として人々の暮らしに関わり守られてきた。

（1）市街地のせせらぎを構成する建造物

① 小浜池

小浜池は三島市立公園樂寿園の中に所在する池である。樂寿園及びその周辺は、かつて樹木の中に清水がこんこんと湧き、七面堂、愛染院といった神社や寺院が点在する聖なる地として位置づけられていた。三島を訪れた小松宮彰仁親王はこの地を気に入り、明治24～25年（1891～1892）に小浜池畔に樂寿館を中心とした10数棟からなる別邸を築いた。この別邸のうち、現存するものは樂寿館、梅御殿および桜御殿である。梅御殿と桜御殿はいずれも2階建て書院造の建物で、かつては樂寿館と渡り廊下で繋がっていたという。これらの御殿からみる小浜池の眺めは、小松宮彰仁親王をはじめとしてその時々の所

有者の目を愉しませたことは想像に難くない。数寄屋造りの邸宅と自然を巧みに利用した日本庭園が造られたことにより、小浜池も美しい庭園の景観を構成する要素の一つとして組み込まれたのである。その後、明治45年（1912）に李王世子娘殿下に譲り渡され、昭和2年（1927）には三島の実業家である緒明圭造氏が一括購入し、個人の庭園とした。その後、第二次世界大戦後の一時期、進駐軍が楽寿館を使用していたこともあったが、昭和27年（1952）、三島市が購入して市立公園樂寿園として一般公開を開始し、昭和29年（1954）に小浜池と周囲の自然林・植生を含む庭園が国の天然記念物及び名勝に指定された。

現在、小浜池の中の島には、五穀豊穣の祭神である倉稻魂命（うがのみたまのみこと）を祀る広瀬神社が鎮座している。元は三嶋大社の摂社の一つであり、四宮（しのみや）とも称された名社であったが、明治時代にこの辺り一帯が小松宮別邸となつた際に別邸外に移転し、樂寿園が市立公園となつた昭和27年（1952）に再びこの場所に勧請され現在に至っている。

また、小浜池は新富士火山の溶岩流（三島溶岩）を透過した伏流水を湛える池であり、蓮沼川と源兵衛川に流れ出る水源として、「水の都」のシンボルであったが、昭和30年代以降は水位が下がり続け、年間を通して小浜池が水を湛えることは無くなってしまった。



写真 楽寿園の小浜池



写真 小浜池にある広瀬神社

② 白滝公園

白滝公園は樂寿園の東側、浅間神社とは道路を挟んだ向かい側に位置する。かつてこの場所は一大湧水地で、樂寿園にかけて広がる溶岩の上にできた森林域であり、小松宮別邸の一部であった。

しかし、昭和9年（1934）、旧国鉄三島駅（現JR三島駅）へ向かう道路が造られた際に東西に分断され、分立した水源地となつた。白滝公園は



写真 白滝公園

市の中心地にあるため季節を問わず人が集まり、特に夏は涼を求めて多くの人々が憩う場所であり、園内にある大きなケヤキの木々は、心地よい木陰をつくり出す。また、足元には溶岩が露出、その間に富士山からの地下水が湧き出し、菰池からの湧水と合流して桜川用水となっている。

菰池から湧き出る水と浅間神社の境内から湧き出る水が合流するこの場所には、かつて白滝と呼ばれる滝があった。寛政12年（1800）、秋山富南により著された地誌『豆州志稿』には、昔この地に白滝寺という尼寺があり、元禄年間（1688～1704）には観音堂になっていたと記されている。千手観音を祀り、人々の信仰を集めていたこの観音堂は、駿豆両国横道三十三観音霊場巡りの一番札所としても知られていたが、明治期に焼失してしまい、祀られていた千手観音は市内本町の常林寺に移された。現在、白滝公園の南東隅に観音堂があるが、この観音堂の建物は昭和25年（1950）に建てられたもので、観音菩薩像も新たに作られた。毎月18日には観音講が催され、その信仰は現在も続いている。

白滝公園の中には、水神を祀る2つの祠があり、それぞれ弁財天と龍神が祀られている。弁財天はもともとインドの河の神で、水神・農業神である。その後、知恵の神と結びつき、音楽・言語の神とされ、七福神の一つとなった。河川の神＝水の神という弁財天の本来の性格に対し、潤沢な水が得られ、その恵によって豊かな産物がもたらされるようという願いをこめて、このように水に関わる社に祀っているのである。また、日本には古来から蛇を水神の化身として神格化する信仰があり、これに古代中国の想像上の靈獸である龍や仏法を守護する八部衆、八大龍王、九頭竜神などが習合して生まれた龍神信仰がある。農耕地帯では祈雨や治水、豊穣祈願の神として信仰されている。

③ カワバタ

三島市街地の川沿いの家では、岸辺に張り出したカワバタ（川端）を備えていた。カワバタとは水道が普及する以前、川の水を用いて水仕事をする際に使用された施設場である。昭和23年（1948）

までは上水道はわずかしかなく、多くの家庭ではすべての生活用水に、川や井戸などの湧水を使用していた。



写真 源兵衛川の共同カワバタでの洗濯（昭和30年代）



写真 桜川のカワバタ

夏、食べ物が腐りやすい季節には、カワバタの杭にフネ（ブリキなどでできた川に浮かべる食料保存箱）を結びつけ、水面に浮かべておいた。フネはいわば天然の冷蔵庫であり、人々の生活に根ざした用具であった。

④ 浅間神社

浅間神社は、楽寿園の東側に鎮座しており、三嶋大社に次ぐ名社で、平安時代に編まれた『延喜式』神名帳にも記載のある古社である。三嶋大社の祭神大山祇命（おおやまつみのみこと）の妃神、波布比売命（はぶひめのみこと）を主祭神として祀っており、三嶋大社の別宮としても関わりが深い。この境内からの湧水を利用する下流の村々は「水かかり」として年貢を納めており、当時の活動を示す、享保21年（1736）小浜水懸惣氏子と記された棟札が6枚残っている。東海道三島宿からの富士登山が盛んになってからは、大山祇命と波布比売命の姫神で、富士山の大神として崇祀されている木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）をも併せて祀るようになった。富士登山をする人たちは必ず浅間神社へ参詣に訪れたという。現在でも浅間神社を参詣してから富士登山に向かう人がおり、JR三島駅で毎年7月に山開き行事を浅間神社協賛で行っている。また、約1万年前の富士山の大噴火の時、この場所で溶岩の流れが止まったために、この神社は「岩止浅間」ともいわれている。ここから湧き出している水は富士山の雪解け水で、古くから下流域にある13村の用水として使用されていた。現在、湧水池の中には水神を祀った祠がある。境内には芝町（しばちょう）の氏神であった芝岡神社が合併して祀られている。



写真 浅間神社



写真 浅間神社にある水神様



図 水神様信仰（黄色）やカワバタ（緑色）、七月盆（赤色）を構成する建造物の分布範囲

（2）市街地のせせらぎにみる活動

① カワバタを利用する生活

水の豊かな町に暮らす三島の人々は、カワバタを利用して、風呂の水くみ、野菜洗い、衣類の洗濯などをしていました。なかには屋敷内に水を引き込み、庭先や台所にまで私設水路を回している家もあった。水辺から離れた家のためには、共同で洗い場として利用するカワバタもあり、近世の長屋で見られた、いわゆる「井戸端」のように地域の人たちの交流の場所ともなっていた。

カワバタは現在、蓮沼川、源兵衛川、御殿川、桜川に26ヶ所残っている。今では川の水を炊事や洗濯、風呂水に利用することはなくなつたが、庭の花木や道路への水撒き作業などに利用されている。また、川の清掃活動をする人たちや水遊びをする子どもたちが進入口として利用し、散歩で通り掛かった人はそこに立ち、川



写真 源兵衛川のカワバタ



写真 御殿川で庭への撒き水に利用されるカワバタ

の流れに揺れるミシマバイカモや川を泳ぐカルガモなどの野鳥の様子を楽しそうに眺めている。そのほか、桜川のカワバタは七月盆に行われる灯籠流しの出流点としても利用されている（詳細は②に記述）。

このようにカワバタは、三島のせせらぎが人々の生活に密着していた昔日の面影を現在に伝え、途絶えることなく人々に利用されている。

② 旧三島町内で行われている七月盆の行事

一般的にいわれる「お盆」とは「盂蘭盆会」の略である。「盂蘭盆会」とはインドを起源とする行事で、毎年7月15日を中心に死者の靈を祀る供養会のことである。日本では『日本書紀』の推古天皇14年（606）の記録が最も古く、のち、先祖供養や祖靈來訪の民俗信仰と習合した。陰暦7月13～15日を中心に行われ、種々の供物を祖先の靈・新仏・無縁仏に供えて冥福を祈る。お盆の終わりの日は送り盆と言って、帰ってゆく先祖の靈のために送り火を焚き、灯籠流しを行う地域もある。これは送り火の変化したもので、小さい灯籠に火を灯し、供物などとともに川や海に流して、先祖の靈を送る行事である。

北伊豆地方周辺では、盆行事が行われる日は7月13～15日、7月23日～25日、7月30～8月1日、8月13～15日の4つに分けられる。そして、三島市では主に農村部にあたる北部の旧北上村（きたうえむら）、東部の旧錦田村（にしきだむら）、南部の旧中郷村（なかごとむら）においては三嶋大社例大祭に合わせた8月13～15日となっており、旧三島町にあたる三島市街地では、7月13～15日となっている。

七月盆、八月盆とともに、お盆の入り日である13日には、先祖の靈を迎える準備として、キュウリで馬を、ナスで牛をつくり、「ご先祖様の乗り物」に見立てる。そして位牌の前に真菰を敷き、この乗り物と団子やそうめんなどを供える。お盆が終わった翌16日朝にはキュウリやナスの乗り物と供物、そして、おむすびを真菰で包んで近所の川を持って行き、川沿いに供えて線香をあげる。供物は本来川に流すものであったが、現在は環境に配慮して、カワバタに纏まって供物や線香をお供えし、祖先を送り出している。

三島の七月盆では、今でも灯籠流しが行われている。この行為は、川が祖先の靈のいる世界へ続いているという他界觀を表わすもので、灯籠流しは川に対するそういった意識を現代へ繋



写真 七月盆の供物



写真 カワバタに供えられた線香や供物

げているといえる。三島の人々にとって、きれいな水の流れる川は生活に密着したものであり、また祖先の靈のいる世界との関わりを尊く存在でもあった。

灯籠流しは7月16日夜、旧三島町の人々によって桜川で行われる。この行事は、昭和5年（1930）に納涼祭として開始され、戦時中一時中断されたが、昭和25年（1950）に再開し、昭和30年（1955）からは三島仏教会が主催し現在に至っている。灯籠流し会場は、小松宮彰仁親王が築いた別邸内の庭園部分にあたり、会場に特設された白滝観音堂脇の壇上では、行事の間、各宗派の僧侶が順番に読経をする。江戸時代に観音信仰の札所として、多くの人々が訪れた白滝観音堂は、その信仰の場としての意義を現在でも引き継ぎ、読経の声が響く中、祖先の靈を導く数多の灯籠は清浄な川の上を流れてゆく。この莊厳で、幻想的な行事に、旧三島町全域から多くの市民が参加し、桜川には2千を超えるぼんぼり付きの小船が流される。



写真 7月16日に桜川で行われる灯籠流し

③ 水をめぐる市民活動

市立公園樂寿園の小浜池は富士山の伏流水の湧出により形成されている。この小浜池を水源とする源兵衛川は、上流は自然河川であり下流は灌漑用水路として利用されてきた。昭和30年代まで豊富だった水量は、周辺部の都市化や企業の水の汲み上げなどにより湧水量が減少し、昭和37年（1962）には小浜池の湧水が枯渇したことにより、小浜池を水源とする源兵衛川も枯渇しドブ川と化した。農業用水としても利用できない状況となった。

昭和39年（1964）には、地下水を利用したコンビナート建設を阻止する反対運動が市民一丸となって行われ、これらの出来事により水と環境の大しさへの市民意識が高まり、河川流域の住民や下流域中郷地区の農家などによって、定期的に行われるようになったのが清掃活動の始まりである。

昭和56年（1981）からは、毎年5月第2日曜日に「三島の川をきれいにする奉仕活動」が行われ、流域自治会や企業・各種団体が参加する清掃活動として定例化され、川底のゴミや雑草の除去などの清掃作業が実施してきた。

その後、平成2年（1990）に着手した源兵衛川親水公園事業や平成4年（1992）から行われている地元企業の冷却水放流を契機に、住民・



写真 河川の清掃活動

企業・行政の連携による三島の水環境の保護・保全に取り組んでいる。

これらの取組みにより、三島市街地のせせらぎは復活し、蓮沼川、源兵衛川、御殿川、桜川などに流れ出て、憩いの場や親水公園として多くの市民に親しまれている。子どもたちが裸足で水遊びをし魚捕りに興じる姿は、三島市民にとって日常の風景であり、身近にある活動の一つとなっている。

④ 水神様信仰

生活をする上で水は必要不可欠なものである。水が地中から湧き出す様子を目にし、そのエネルギーに超自然的存在を感じた人々は、水の恵をもたらしてくれる不可視な存在を神様として、源泉近くに祀った。

富士山の雪解け水を源とする伏流水が自噴している市立公園樂寿園の小浜池やその東側にある浅間神社、白滝公園は、半径 200mほどの範囲に分布しており、それぞれに「水神様」などの神が祀られている祠や社があり、また、かつては禊の地であったことなど信仰に関連する伝承を有している。

白滝公園にある弁財天と龍神の2つの水神の祠には、市民の手により水や塩などの神饌が絶えることなく捧げられている。7月15日、16日には浅間神社とその境内に合併されている芝岡神社の祭りが行われるが、これにあわせて白滝公園でも水祭りが行われる。据置山車が出て、しゃぎりや子ども神輿、民謡踊りなどが催され、露店も並び、灯籠流しも行われて、三嶋大社の夏まつりに次ぐ賑やかなものとなっている。



写真 白滝公園にある弁財天を祀る水神様



写真 白滝公園にある龍神を祀る水神様

おわりに

水は循環することで上流域から下流域に豊かな水環境を残していくものであり、三島でいえば富士山に降った雨が伏流水となり、小浜池・浅間神社、菰池・白滝公園などで自噴し市内河川のせせらぎとなる。せせらぎは流下し、市南域にある中郷温水池（なかざとおんすいち）を経由して各水田へ、さらに狩野川などの河川を経て駿河湾に注ぎ込む。上流域のせせらぎの環境と下流域の農作地帯は、中郷温水池を中心とする都市と農村を結んだ水路網により結ばれている。この水路網の水質の保全は、豊かな生態系を育み、美味しい米や野菜を実らせ、市民の生活に恵みを与えていている。

また、清らかな水の流れは三島の人々の信仰心と深く関わってきた。小浜池や菰池と関わりのある鏡池は、三嶋大社への信仰心とともに敬われてきた。三嶋大社と縁の深い浅間神社も、富士山信仰との繋がりの中で重要視されていた。古来より、神道において最も忌まれるものは穢れであり、その穢れを払い清浄に保つものとして、水はなくてはならないものである。三島が伊豆国一宮である三嶋大社の鎮座地となった大きな要因は、清流を擁していたことと言える。

現在も三島には豊かな水が溢れしており、水に関わる信仰やその拠点となる浅間神社をはじめとした祠や社、水にまつわる伝統的な盆行事、水を利用するためのカワバタ、水から生まれた産業や特産品などがある。

きれいな水が循環していることで、三島市街地には水神を祀る社や祠、灯籠流し会場である白滝公園などの建造物が残されており、それらと、流域に住む人々のきれいな水が流れている状態を守りたいという活動が一体となって、良好な歴史的風致を形成している。

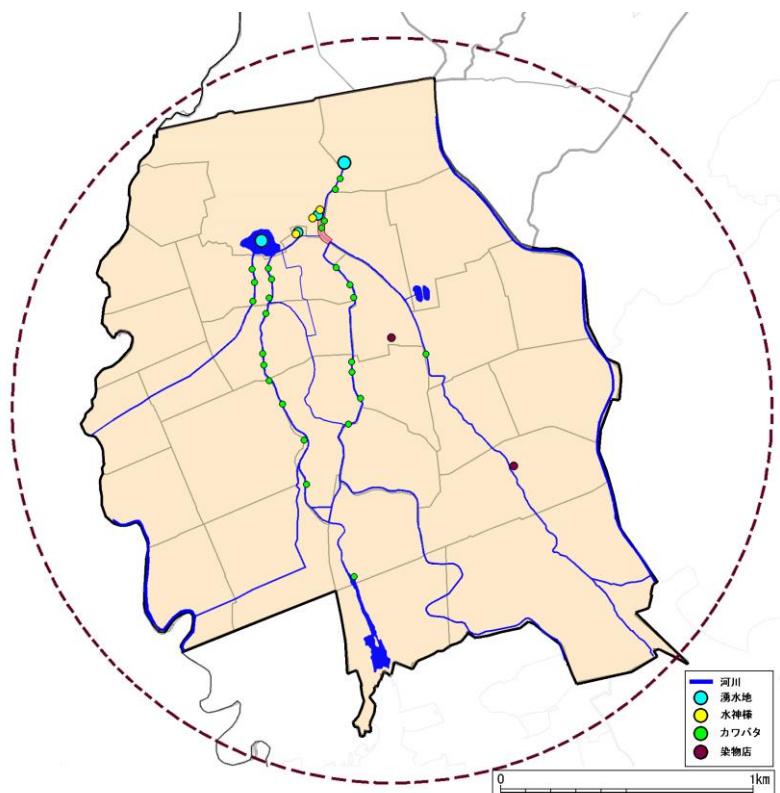


図 市街地のせせらぎにみる歴史的風致の範囲

《コラム》菰池

菰池はJR三島駅南口から東へ約300mの場所に位置し、現在はこの池を中心とした菰池公園として整備されている。カワセミなどの姿も見られる市民に親しまれている公園で、三島を流れる桜川の源泉である。整備前のこの一帯は、真菰が多く自生する湿地帯であり、菰池と名付けられた。

また菰池の西側に鏡池がある。水量が豊富だった江戸時代に三嶋大社の参詣者はまずここに立ち寄り自分の姿を池に映し身なりを正し清めたといい、これが鏡池の名称の由来となっている。現在、鏡池は冬季には枯渇しているが、市民の手により整備され手入れがなされている。ここにある「鏡池横臥溶岩樹型」は、平成26年(2014)10月に市の天然記念物として指定された。これは約1万年前の富士山の噴火によって形成されたもので、流れてきた溶岩が樹木を取り込み、樹幹部と接した溶岩が急冷されることにより樹幹の型を残したものである。



写真 菰池



写真 市指定文化財 鏡池横臥溶岩樹型

《コラム》三島の染物業

三島市内の河川のせせらぎを利用した製造業として染物業がある。染物業は水が要であり、年間を通しての水温は15°Cほど一定で、夏は冷たく冬は温かいという三島市内を流れる川の水の特性は、染物に適している。木綿、麻などの型付けをした布を川に浸しておくと、川の流れできれいに晒される。

最盛期の昭和2年(1927)頃の三島には、染物屋が22軒あり、現在は2軒残っている。

染物作業は、庭先でハケを使って引き染めをし、布を鮮やかな色で染める。そして、店の裏を流れる川で糊を落とす。染物屋のこの作業風景は、水がきれいであることを象徴する姿であるともいえる。



写真 染物屋作業場から直接に桜川へ繋がるカワバタ



写真 白抜きにしたい部分(文字)に糊置きをした後、刷毛で引き染めをする

《コラム》三島とうなぎ

水の豊かさは食にも反映されている。昔、三島の人は三嶋大社の神池（しんち）にいるうなぎを三嶋大明神の使者と考えていた。身近な動物などを神の使者とする信仰は春日大社の鹿や日枝神社の猿などにも見られるものであり、この神さまの使者を傷つけたり、食べたりなどしたら、神罰が下るとされていた。

江戸時代、三島に宿泊した二代将軍秀忠も神池のうなぎを食べた供の者を罰したという。しかし幕末、江戸に向かう途中、三島に泊った薩長の兵隊はこのうなぎに関する言い伝えを知らず、うなぎを捕まえて食べてしまった。最初は不安そうにこの様子を見ていた三島の人々も、兵隊たちに神罰が当たらないのを知り、ようやく安心してうなぎを食べるようになったという。

三島にある一番古い老舗のうなぎやの創業は、安政3年（1856）で、今では三島の名物といえば、うなぎという人が多い。しかし、生産地でもない三島で、いったい何故うなぎが名物になったのか。実はこの答えもやはり水にある。浜名湖や大井川など県内他地域や鹿児島県などから取り寄せたうなぎは、調理前に地下から汲み上げられた富士山の伏流水に3～4日晒される。これによりうなぎの持つ生臭さや泥臭さが消され、栄養素であるタンパク質を損なわずに余分な脂肪分だけが除去されるのである。これが美味しさの秘訣だとされる。

静岡県東部蒲焼商組合連合会では、会場は加盟各支部持ち回りで毎年移動するが、三嶋大社神池、富士市浅間神社、伊豆の国市の狩野川などでうなぎ100匹を放流する放生会を実施して、うなぎへの感謝を表し、種の保存と商売繁盛を祈願している。



図 三島市街地での主なうなぎ店の分布図：
JR三島駅前と三嶋大社前の大通りに主に分布している。



写真 市内うなぎ店共通の
「うなぎ横丁」の垂れ幕



写真 富士山の伏流水で晒すのが
美味しいの秘訣



写真 平成26年度のうなぎの
放生会（感謝祭り）